

国際交流と言語

町 田 健

人類が東アフリカで誕生し、その地から大なり小なりの集団が世界各地へと移住していくことで、人類の言語は多様化し、時に相互に排他的な関係に立つ地域や国家が成立していった。成立した集団が完全に孤立した状態で存立することが可能であるのならば、集団間の交流が生じようはずはない。しかし、人間がその高度な知力をもって、知識と行動、そしてその成果としての知覚可能な構築物を主要な構成要素とする文明を発展させるべく運命づけられた存在であるとするならば、文明の維持と発展のために、集団の間に交流が生じるのは蓋し必然的な現象である。

誕生した時点では、軽度の方言の変異はあったに違いないが、基本的には均一であった人間の言語も、集団の移動と分化によって、多数の互いに異なる個別言語へと変化していった。人間の言語が変化する根本的な理由はまだ解明されていないのであるが、言語が変化したからこそ、言語がこれほど多様になったということは事実である。

異なった言語を使用する集団が相互に交流をする場合に、使用言語や翻訳の問題が生じてくるのは時代によって変わることはない。しかし、ある集団が武力によって別の集団を征服し吸収するという行動こそが、人類の長い歴史を通じて通常のあり方であった。この場合には、複数の言語の平和的共存よりも、一方の言語の消滅という道を辿る方がむしろ普通である。

人類史上最も偉大な文明を築き上げたギリシア人は、その故郷からバルカン半島南部およびその周辺の地中海上の島々へと移住した際には、すでにこの地に居住していた、今となっては不明の民族の言語を、自らの言語ギリシア語によって駆逐したことであろう。都市国家の時代には、アテネ、スパルタ、テーベなどの諸都市が互いに抗争し合う状況であったから、ギリシア語の使用域が飛躍的に拡大することはなかった。しかしアレクサンドロス大王が大帝国を築き上げたことにより、ギリシア語は古代エジプト王朝で使用されていたエジプト語に取って代わり、プトレマイオス朝の言語となる。そして、プトレマイオス朝の首都であったアレクサンドリアが、ヘレニズム文化の中心地となることによって、ギリシア語は東地中海地域の共通語

としての地位を確立するのである。

ギリシア人にはるかに送れて大国を築いたローマ人の言語ラテン語は、ギリシア語に比べると文明による洗練を受けていない言語であった。しかし、ラティウム地方の小都市国家から出発して、エトルリア文明を吸収しつつ、周辺の初部族を征服することで、イタリア半島全域やシチリア島を支配下に置くようになる頃には、ギリシア文化とギリシア語の強い影響のもと、ラテン語は文学を表現し、哲学を論じるための調琢された言語としての地位を獲得するようになっていた。

ローマ人は、ギリシア人と異なり、国家の版図をたゆまなく拡大していく民族であった。それは、かの大カトーが元老院で演説する度に、「ともあれ私はカルタゴを滅ぼすべきだと思う (Ceterum censeo Carthaginem esse delendam)」という文句で演説をしめ括ったという故事にもよく顕れている。ローマの拡大は、ラテン語の使用地域の拡大でもあった。さすがに、バルカン半島のギリシア語にラテン語が取って代わることはなかったものの、かつてのギリシア語使用域であった南イタリアとシチリア島は、ラテン語を日常的に用いる地域となる。ラテン語の拡大にとって重要であったのは、イタリアの北方にあるガリアとイベリア半島、そしてダキアがローマの属州となり、この地域に移住したローマ人は当然のこととして、先住民のほぼすべてが速やかにラテン語話者となったことである。

5世紀末にローマ帝国が崩壊することにより、ラテン語はロマンス諸語へと分化するのであるが、言語変化という観点からして特に興味深いのは、フランス語の特徴である。ガリアに移植されたラテン語は、先住民であるガリア人の言語の影響で、イタリア本土のラテン語とはいくらか異なったものになったと考えられる。しかし、この変異はあくまでもラテン語内部の方言的差異と見なすことができるようなものであった。ところが5世紀になって、ガリア北部にフランク族が侵入してこの地域を支配するようになると、この地のラテン語方言は、フランク語からの深甚なる影響を被ることになる。強勢のない音節の母音の弱化や脱落、強勢のある母音の二重母音化、ラテン語ではすでに失

われていた子音 /h/ の復活などの音韻的側面、軍事、農耕、行政など幅広い分野における、フランク語からの借用語の増加など、音韻と語彙の面で、誕生期のフランス語は、他のロマンス語とは異なった特徴を持つようになった。

さらに特徴的なのは、「文頭の要素+動詞+他の要素」という、現代のドイツ語にも見られる語順の規則が、フランス語初期の文献から例証されるという事実である。言語接触によって、一方の言語が他方の言語の統語規則を導入することは稀である。中世後期には、フランス語の統語規則は他のロマンス語と同様になるのではあるが、中世初期のフランス語は、極端に言えばラテン語とフランク語の混合言語とでも言えるほど、フランク語の強い影響を受けていたものと考えてよい。

ピジンやクレオールと呼ばれる言語が混合言語の代表だとされるが、パプア・ニューギニアの公用語としての地位を獲得しているトク・ピシン語などを見てみると、基盤となる言語が示す特性が、全体に単純化・規則化したものとの印象を受ける。だからこそ、基盤言語が英語、フランス語、ポルトガル語などのヨーロッパ諸語であれば、これらの言語の言語的特徴には類似性があるから、それを基盤として発達したピジン・クレオール諸語にも類似性が認められるのではないかと思える。

ところが中世初期のフランス語の場合は、ラテン語的特徴の方が優勢ではあるにしても、音韻や統語の面でフランク語的特徴が顕著なのであるから、混合の程度はむしろ高いと言える。つまり、言語接触により生じた古フランス語は、ピジン化の過程を経ずして、混合言語に近接する特性を獲得するに至った珍しい言語事例を提示しているのである。

フランス語は、フランク語との直接的接触の結果生まれ出た言語である。翻って我が日本語を考えてみると、フランス語のような、異言語を使用する民族による支配という、直接的な外国語との接触は経験したことがない。それでも、遣隋使や遣唐使を通じての中国語との接触は生じたのであり、たとえ傍層ではあっても、中国語の日本語への影響が非常に大きかったことはよく知られている。現代日本語の語彙の半分以上は、中国語からの借用語（漢語）であるが、驚くべきは、「いち」「に」「さん」などという漢語数詞が、「ひ」「ふ」「み」などの和語をほとんど駆逐してしまっているという事実である。英語がフランス語からの借用語を大量に取り入れ、基礎語彙の側面にまでそれは及ん

でいるのであるが、英語の数詞は古来のゲルマン語起源である。数詞が重要な基礎語彙であることは言うまでもないから、その数詞を中国語起源の借用語に置き換えてしまったということは、日本語が中国語傍層から受けた影響は、意外に深いものであったと考える根拠を与える。語彙以外でも、日本語の音韻体系に拗音が加わったことや、撥音が音素として定着したことなど、音韻変化にも中国語との接触が関わっている。さらに、漢語が導入されたことにより「漢語名詞+する」という形式の派生動詞が大量に形成されるという、形態的な面での変化も生じている。

日本語と中国語の間接的な接触の結果生じた変化は、現代世界での言語接触の様態を思わせる。現代では、武力による異民族の征服と支配による直接的な言語接触が生じることは、幸いにも極めて困難になっている。したがって、言語接触が生じるのは、異言語によって表現された文化的産物を媒介とする、間接的な場合が中心である。この時の異言語とは、英語であるのが通常観察される事態である。ヨーロッパの辺境に位置するブリテン島でアングル族やサクソン族によって細々と使用されていただけのゲルマン語が、今や世界のあらゆる場所で、国際交流のために使用される共通語としての絶対的地位を獲得するに至っているのは、この島を征服したカエサルには想像すらできなかったことだろう。

国や地域によって程度の差こそあれ、英語との間接的な接触は不可避の事態である。たとえ間接的であったとしても、語彙以外の側面でも言語に変化が生じるのは、日本語と中国語の接触で見た通りである。日本語では、一度は消滅した「ティ」という音節が復活したり、「花たち」「野菜たち」のような、無生物を表す名詞に複数を表す接辞が付加されたりしているという現象が観察されるが、これは英語からの影響である可能性はある。少なくとも前者については確実であろう。いずれにしても、現代世界において英語との接触による言語変化が生じつつあるし、今後も生じるであろうことは十分に予測できる。もちろん、言語変化は、数多くの可能な選択肢のうちで、偶然的に1つが実現するという過程をとるものであるから、個別言語における英語との接触による変化を確実に予見することはできない。言語変化の要因が言語接触に限定されるのではもちろんないが、その要因の1つとして、世界共通語としての英語との接触がありうるであろうというのが、本論の結論である。